2019（令和元）年度　学芸員等在外派遣研修実施報告書

山口県立萩美術館・浦上記念館
荏開津　洋子

2019（令和元）年度学芸員等在外派遣研修の実施結果について、下記のとおり報告します。

１　研修テーマ

先進的なコレクションマネジメント、資料管理のあり方

美術館における浮世絵版画の展示と保存の両立について、欧米と日本における方針あるいは方法の相　違を学び、新たな方向性を見出すため。

２　研修期間　　2019（令和元）年 9 月 16 日～2019（令和元）年 10 月 11 日

３　研修概要

（１）研修先の名称

ロードアイランド・スクールオブデザイン大学美術館

（２）研修の内容

同館の版画・写真部門に勤務するアジア美術専門の学芸員ワイイー・チャン氏のもとに配属され、学芸員の通常業務の視察を行った。

館長から学芸、普及、修復、事務担当の職員や警備員まで、美術館職員全員が参加する会議、学芸会議、ボランティア職員との交流会にも参加した。

またロードアイランド・スクールオブデザインおよびブラウン大学の教員が、同美術館の版画写真部門の閲覧室で行う授業を視察した。

学芸員が両大学の学生のために美術館で行う授業の準備補佐を行った。

また収蔵版画作品の調査とデータ整理の補助を行った。

（３）研修の成果

■美術館の概要について

ロードアイランド・スクールオブデザイン大学（以下、通称であるRISD＝リスディーと略記する。同大学美術館については、RISD美術館と表記する）は、アメリカ合衆国（以下、米国）の東北部に位置するロードアイランド州の州都プロビデンスにある私立美術大学である。

ロードアイランド州は、米国最小の州でありながら、RISDの他に11校の大学がある文教都市である。RISDは隣接するブラウン大学と提携し、共通授業を行っている。RISD美術館では、コレクションを閲覧しながら講義を行う形式の授業を、両大学の教員が行っていた。この授業については後述する。

大通りに面した入口

大学は敷地を塀で囲まず、建物は全て一般道に面して建っている。そのため、大学自体が街に溶け込んでいる印象を受けた。美術館の建物にある２つの入口も一般道に面している。交通量の多い大通り側の入り口は、ガラス張りのイベントスペースで、反対側の比較的静かな通りにある入り口には、ローカルカフェが早朝から営業している。

このような建築上の特徴は、街に住む人や大学生の日常に溶け込んだ美術館の在り方を象徴しているように思えた。それは非日常の贅沢な場を演出する傾向にある日本の美術館のあり方と対照的で印象に残った。

1877年のRISD創立当初から、美術館が併設されていた。収蔵品の分野は東西の古代から現代までと幅広く、創立初期に寄贈された美術品がコレクションの根幹をなしている。現在も寄贈はコレクションの充実を図る上で重要な手段である美術館では考えており、研修期間中にも、館長や学芸員が寄贈を検討する所蔵家に美術館を案内する場面に何度か遭遇した。RISD美術館が所蔵する千点以上の浮世絵版画の核をなす約500点の花鳥版画は、アメリカを代表する富豪のロックフェラー２世夫人が同館に寄贈したものである。またRISDの教員や卒業生から自作を寄贈されることも多いという。

美術館は３棟の建物を連結した構造である。企画展示室、各分野の常設展示室、学生や教授の作品を展示するギャラリーがある。RISD 美術館だけでなくアメリカやヨーロッパの美術館の特徴であるが、常設展示の展示期間が数ヶ月から半年と日本に比べて非常に長い。浮世絵版画についても、日本では通常１年に１ヶ月の展示を行い、次の展示まで１年以上の保存期間を設けることが通例になっているが、RISD では半年間展示し６年の保存間隔を設けている。この点については後で詳しく述べたい。

■美術館の活動

学芸員は通年の常設展示と数年ごとに交代で担当する企画展示を担当する。担当学芸員が学芸課のチーフと相談しながら計画を立て、それをもとにコーディネーターが館全体の展示スケジュールや予算の調整を行う。各部門に保存・修復の専門家がおり、展示予定の作品の保存状態を確認し、展示に備えて額装し、必要に応じてクリーニングや修理を行う。

企画展示のための作品借用等で生じる文書手続きは事務担当者、展示作業はハンドラーと呼ばれる取り扱い担当者、キャプションやパネル等の展示に関わる印刷物の制作、イベントの実施というように、日本よりも細かく分業化されている。一つの仕事に関わる人が多いため、簡単な協議や打ち合わせを頻繁に行っていた。また分業化は各分野の専門家を抱えることでもあるので、外注せずに館の職員だけで実現できる仕事が多い。たとえば展示を予定している住吉派の源氏物語画帖の広報用印刷物の制作のために、アジア美術担当学芸員と美術館専属の写真家、そして写真担当学芸員の３人で協議を行っていた。写真家は RISD の先生でもあるというから RISD ならではということもできるだろう。

毎月定例の会議は、館の正職員全員が参加する会議、学芸員の会議、監視のボランティアと職員が交流するお茶会があり、私もこれらの会議に参加させていただいた。職員全体の会議では、館長が学芸員に企画の進行状況を確認する他、警備員に「警備はうまくいっている？」と直接質問するなど、文字通りの全員参加型であった。私が参加した時は、美術館に一度も来たことのない人を招待して感想を聞くという、アウトリーチ活動の報告が行われていた。そこでは美術館と外部の人との間に壁があるのではないか、美術館の敷居を低くするために、入り口のスペースを改善してはどうかという意見が出されていた。日本と比較すると、全く壁を感じさせないカジュアルな美術館であったが、それは内部の人々の強い意識の反映であることを改めて認識した。

分業体制の話に戻すと、各部門のフロアにある収蔵庫は、朝、警備員が来て解錠し、

夕方には施錠に来る。日中、収蔵庫は開いているが、フロアの入り口がカードキーで施錠されているので、外部から無断で侵入することはできない。施錠に来る５時前までに、閲覧した作品は収蔵庫内に収めなければならない。学芸員が残業や休日出勤をしていても、収蔵庫は開けられない。その点は不便に感じたが、分業によって学芸員の作品に対する心的負担が軽減されているともいえるだろう。

収蔵庫内は、版画、写真、本などの資料を中性紙箱に収めて棚に保管しており、日本と変わらない。データベースは、基本情報の入力は済んでいるものの、文字情報や展覧会歴などは入力されておらず、調べ物はカードの記録によるところが多かった。

展示替え期間の展示室は閉鎖されるが、簡単な展示替えは開館前の早朝に行われていた。研修中も毎朝どこかで展示替えを行っているという印象であった。

■美術大学に付属の美術館としての活動

プロビデンス州には大学が多いことはすでに述べたが、RISD 美術館では RISD の他に７つの大学と提携し、学生に対する様々なサービスを行っている。例えば、学生本人が入館無料となるだけでなく、週末には保護者も入館無料となる他、事前予約制で実物の作品を資料室で閲覧できるなど、あらゆる分野を学ぶ大学生に対して、美術への興味を育成する場として機能している。

隣接するブラウン大学は、RISD と共通の授業が行われていることもあり、美術館においても、両大学の教員がコレクションを閲覧しながら講義を行う形式の授業を行っていた。その授業の準備や当日の補佐を学芸員が行う。事前に教員と授業内容について打ち合わせを行い、相応しい作品を選び、授業の前に閲覧室に準備しておく。作品の選択は教員のリクエストによる時もあれば、学芸員が全てを選ぶ場合もあるという。また教員から依頼を受けて、学芸員が作品を前に授業を行うこともある。いずれにしても実物の作品を鑑賞しながら、教員や学芸員の解説を聞くという贅沢な授業であった。研修中は秋の新学期であったので、授業は週に２～３回は行われていた。担当学芸員は事前の予習や作品選択にかなりの時間を費やしており、美術大学に付属する美術館の学芸員として重要な職務のひとつとなっている。

授業の前に浮世絵版画が並べられた閲覧室と授業

学生が個人的に学芸員にアポイントメントを取り、興味のある作品の閲覧をしたり、学芸員に説明を受けたりすることも行われていた。特に作品制作のために閲覧を希望する学生の抽象的なリクエストにも、学芸員が親身に対応している姿が印象的であった。また美術館では、RISD とブラウン大学の大学院生をインターン生として受け入れていた。彼らは学芸員や教授が美術館で行う授業や、閲覧の補佐を行っていた。

■ 研修目的の考察

私の研修目的は、先進的なコレクションマネジメント、資料管理のあり方を学び、美術館における浮世絵版画の展示と保存の両立について考察することであった。研修中に知ることができた日本との相違点について述べたい。

アメリカやヨーロッパの多くの美術館がそうであるように、RISD 美術館も常設展示の展示期間と保管期間が日本に比べて長い。また他館から借用して行う企画展示の本数が少なく、コレクションによる常設展示が基本である。

常設展示の期間を長く設定する利点は、まず常設展示の回数が減るので、学芸員は展覧会準備や他の仕事に時間をかけることができる。よく練られた内容の展示となり、常設展示の企画をより見ごたえのあるものにすることができるだろう。また筆者が勤務する美術館の現状では、人気のある作品ほど展示回数が多く、保管期間を過ぎるとすぐ展示や貸し出しとなり、作品に対する負担が大きくなっている。展示と保存期間の設定が長ければ、展示・撤去・輸送などを含めた作品の移動の回数が減ることになり、それだけ作品に対する負担を減らすことが出来るだろう。

照明の工夫などを行えば、日本の美術館においても浮世絵版画の展示期間を延長することは可能だろう。しかし保管期間が長くなれば、次の企画の妨げにならないか、名品がなかなか展示されないことで来館者の関心を失うことはないかなどの不安が残る。ま

た年間での常設展示の回数が減ることによって、あまり展示される機会のない作品が表に出される機会が減るかもしれない。また他館からの借用依頼に応えることも難しくなるであろう。

これらの対処法として、展示回数が多い作品に限り、展示期間と保存期間を短く設定することも一つの案である。欧米並に常設展示が長いという前提で、通常は６ヶ月展示して６年保管するところを、例えば２ヶ月展示して２年保管とする。展覧会の準備期間が長いはずなので、スケジュール調整は現状に比べて余裕が生じるだろう。

作品保存のためには、作品を頻繁に展示することはできない。保存期間を設けなければ、作品の状態を後世まで保持して伝えることはできない。展示と保存期間の調整は、館の事情や個々の作品ごとに検討の余地があるといえるだろう。検討する上で作品の展示歴や展示環境の記録が重要な判断材料となってくる。

RISD では同じ常設展示をたびたび見に来る常連が多いという。ボランティアやカフェに集う人々にしても、美術館が日常に存在しており、特別な場所ではないということが広く浸透しているように見えた。アメリカと日本では美術館のあり方が違うということが、この相違の前提にあるだろう。しかし一般的な考え方がそうであるというだけでなく、美術館の職員全体が外部との壁をなくして日常的な場所になるために努力をしているところも垣間見ることができた。特別展示や名品に頼らない魅力づくりも必要である。

また展示のテーマは、歴史を追う内容や作家紹介ではなく、ジャンルや時代を広げて展示できるようなテーマ設定を行っている。版画の展示室では「昆虫」というテーマで、東西の近現代の作品が展示されていた。名品や有名な作者の代表作を展示する必要がないテーマなので、展示環境や保存期間について配慮が必要な古美術の負担を減らすことができる。展示テーマの工夫が、古美術作品の保存に有益であることは認められる。しかし浮世絵と東洋陶磁を専門分野に掲げている筆者の勤務館では、名品や代表作の紹介、歴史的な視点による展示を無くすことは難しいと思われる。バランスを図った上で、展示テーマの工夫も必要であるだろう。

また業務の分業化によって学芸員の負担が軽減されているが、仕事に関わる人たちとの協議が重要である。若い学芸員の発言が通りにくいなどの問題点もあると聞くが、協議を通じて、多角的な視点を反映することに繋がっているのだろう。

また学芸員が学生を対象に個別の閲覧に応じることによって、展示よりも作品への負担が軽く、必要な人が作品を見ることを実現している。美術大学に付属する美術館の特徴ではあるが、常設展示を基本としていることへの対応策としても有意義に思われた。

今回の研修で見聞した RISD 美術館でのコレクションマネジメントや資料管理のあり

方は、昔ながらの美術館のものに近いと感じた。しかし特別なことがなくても、地域の方や学生に親しまれる場所であり、美術館側もそうありたいと努めている。例えていうならば、日本の図書館のあり方に近いように思われた。

（４）研修成果の活用計画

筆者の勤務館において、将来的に常設展示の期間が長くできるように検討を試みたい。まず展示期間が６ヶ月と２ヶ月の場合に、それぞれ展示スケジュールにどの程度の支障が出るのか、保存上のメリットがどの程度生じるのかを検討した上で、館に相応しい展示と保存期間案を作成し、実施に向けて検討していきたい。

RISD 美術館で行ったロックフェラーコレクションの浮世絵版画の調査結果を、来年度開催予定である花鳥版画の展覧会に反映する。